

# SVM と CIELUV 色空間を用いた 1 型 2 色覚, 2 型 2 色覚の色の見え方 の分類

坂井 法仁

令和 2 年 2 月

九州大学理学部物理学科  
情報理学コース

# 目次

第 1 章	序論	1
1.1	色覚異常について	1
1.2	カラーユニバーサルデザイン, 色覚シミュレーションについて	3
1.3	本稿の目的	3
第 2 章	先行研究	5
第 3 章	実験と結果	7
3.1	データセットの説明	7
3.2	実験 1	7
3.2.1	手続き	7
3.2.2	結果	10
3.3	実験 2	11
3.3.1	手続き	11
第 4 章	結論	13
参考文献		14

# 第 1 章 序論

## 1.1 色覚異常について

世の中には、X 染色体がトリガーとなる先天的な色盲者 [1]、色弱者 [2] や加齢によって色の見え方が後天的に変化する人 [3] がいる。

前者の場合、多くの人は視細胞に L 錐体 (L cone)、M 錐体 (M cone)、S 錐体 (S cone)、杆体 (rod) の 4 種類を持っているが、色盲者は 1 種類以上の錐体細胞 (cone cell) が先天的に欠損していて<sup>1</sup>、色弱者は欠損は無いものの刺激の光の波長に対する錐体細胞の感度分布が異なっている。これらを合わせると、国内では男性の約 5%、女性の約 0.2% が色盲者、色弱者である [4, p. 4]。L 錐体が欠損している色盲を 1 型 2 色覚 (protanopia)、M 錐体が欠損している色盲を 2 型 2 色覚 (deuteranopia)、S 錐体が欠損している色盲を 3 型 2 色覚 (tritanopia) という<sup>2</sup>。先天色覚異常の大多数は 1 型 2 色覚と 2 型 2 色覚である [5, p. 9]。図 1.1.1–1.1.4 は可視光のスペクトル画像とそれに 1 型 2 色覚、2 型 2 色覚、3 型 2 色覚のシミュレーションを実行した結果である。1 型 2 色覚と 2 型 2 色覚の色の見え方は似ている。図 1.1.5 は国際照明委員会 (Commission Internationale de l'Éclairage ; CIE) が 2015 年に制定した 2° 視野の CIE2015XYZ 表色系 (CIE2015XYZ color system) から導出される正規化錐体分光感度 (normalized cone fundamental) である。L 錐体と M 錐体の錐体分光感度の分布は近くにあり、3 種類の錐体の応答値を 3 次元空間にプロットすることで構成される *LMS* 色空間 (*LMS* color space) は *L* 軸の基底ベクトルと *M* 軸の基底ベクトルが近い向きを向いている斜交座標系になっていて、1 型 2 色覚に対応する平面  $L = 0$  と 2 型 2 色覚に対応する平面  $M = 0$  も近い。1 型 2 色覚と 2 型 2 色覚の色の見え方の類似性はここからきていると考えられる。

加齢による色の見え方の変化は核白内障 (nuclear cataract) に伴う水晶体 (crystalline

---

1 錐体の数は少ないが完全に欠損している訳ではないという人もいて、こちらは軽度であれば色弱に含めることがある。

2 色盲者を表すときは接尾辞が -ia から -e に変化する。E.g. protanope.

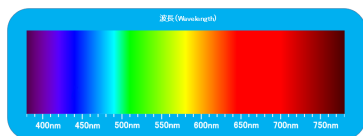


図 1.1.1 可視光のスペクトル画像（波  
長域：380 nm–780 nm，分析・計測・  
測位用 アート開発 Labs[6] より引用）

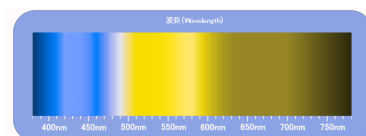


図 1.1.2 図 1.1.1 の 1 型 2 色覚の見え  
方のシミュレーション（Colorblind Pro  
を使用，以下同様）

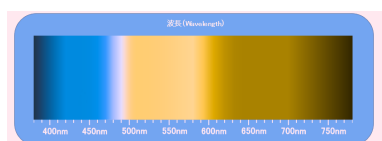


図 1.1.3 図 1.1.1 の 2 型 2 色覚の見え  
方のシミュレーション

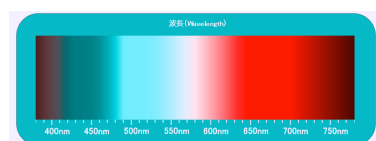


図 1.1.4 図 1.1.1 の 3 型 2 色覚の見え  
方のシミュレーション

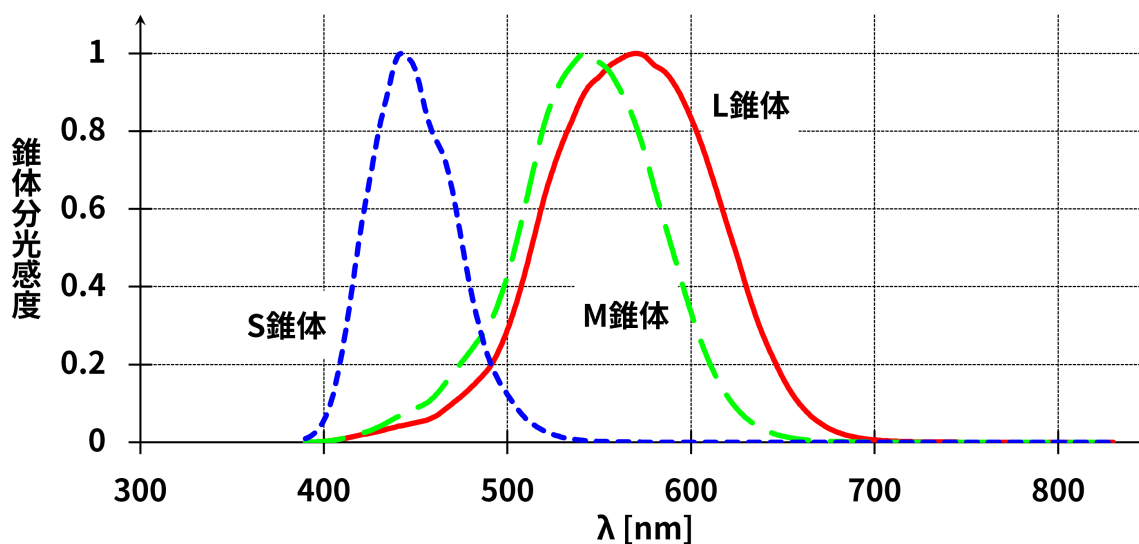


図 1.1.5 CIE2015XYZ 表色系（2° 視野）から導出される正規化錐体分光感度

lens) の黄変によって光が錐体に届く前にスペクトルが歪められることによって起こる。短波長の光が吸収されやすい為、青紫や青緑等の青系統の色の識別が難しくなる他、液体、炎や電光掲示板が見え辛くなる [7]。

## 1.2 カラーユニバーサルデザイン，色覚シミュレーションについて

色盲者や色弱者でも識別しやすい色の組み合わせを用いて情報伝達を行うカラーユニバーサルデザインが進められている。多くの色覚異常当事者の協力の下でカラーユニバーサルデザイン配色が考案される ([8, pp. 1091–1099], [9] 等)，どんな人でも適切に識別できる組み合わせのチョークが開発される [10]，JIS Z 9013 (図記号—安全色及び安全標識—安全色の色度座標の範囲及び測定方法) が改正される [11] 等である。また，Brattel らが 1 型 2 色覚，2 型 2 色覚，3 型 2 色覚の色の見え方をシミュレートするアルゴリズムを発表 [12] してからは，少しずつ改良を加える形で様々なシミュレータが作られ，3 色覚者でも彼らの見え方を疑似体験できるようになった。

しかし，Brattel らのアルゴリズムを零から実装すると，前処理として可視光波長域上での数値積分を 3 回，3 次正方行列の逆行列の計算を 1 回，3 次元ベクトルの外積を 2 回実行し，更に各色毎に 3 次正方行列と 3 次元ベクトルの乗算を 3 回ずつ行わなければならない，24 bit の RGB 色空間で  $2^{24}$  色<sup>3</sup>全てに亘って変換を掛けながら当事者と見え方を摺り合わせていくのは大変な時間を要する。その上，実装や改良に際して色彩学や生理学に関する必要な知識が多く，専門外の人に取り組みにくくなっていると言わざるを得ない。

## 1.3 本稿の目的

そこで本稿では，人口が比較的多く，色の見え方が類似している 1 型 2 色覚，2 型 2 色覚に着目する。本学芸術工学研究院デザイン人間科学部門の須長正治准教授が研究されている natural color system (NCS) に関する色のデータセット<sup>4</sup>を用いて，NCS の AdobeRGB 座標，サポートベクトルマシン (support vector machine ; SVM)，Gauß 過程 (Gaussian process ; GP) による Bayes 最適化 (Bayesian optimization) で NCS の色を 1 型 2 色覚，2

3  $2^{24} = 16,777,216$ .

4 本来は 1950 色であるが，手元に届いた時点で S2075-Y60R と S3050-R20B が同梱されていなかったという。従って，以下で「NCS」と言う時はこれらを除いた 1948 色を指す。

型 2 色覚それぞれの色の見え方に分類できることを示す．更に，それで得たパラメータと 1948 色の NCS 全体を用いて，AdobeRGB 色空間上の非負格子点 ( $2^{24}$  色) 全てにおける各 2 色覚での色の見え方を予測する．各非負格子点の正解ラベルが未知であることを踏まえ，色差 (color difference)<sup>5</sup>が定義されている CIE1976( $L^*, u^*, v^*$ ) 色空間 (CIELUV 色空間) に座標変換して予測ラベルの代表色との色差による精度評価も行う．

---

5 2 つの色の区別しやすさに関する定量的指標．

## 第 2 章 先行研究

Huang らは Brattel らのアルゴリズムを基に, 「変換の自然さ」を維持しながら色差を保つ 1 型 2 色覚, 2 型 2 色覚への色変換を提案している [13]. 「変換の自然さ」を維持する為に, (1) 変換前後で輝度 (luminance) を変えない, (2) 変換前で同じ色相 (hue) を持つ 2 色は変換後も同じ色相を持つ, (3) 変換前で同じ彩度 (saturation) を持つ 2 色は変換後も同じ彩度を持つように, CIE1976( $L^*$ ,  $a^*$ ,  $b^*$ ) 色空間 (CIELAB 色空間) 上の  $a^*b^*$  平面を回転する. その回転角は, 変換前の色差と合成変換 (Brattel ◦ Huang) 後の色差の差の平方和の誤差関数と (一旦省略).





## 第3章 実験と結果

### 3.1 データセットの説明

本稿で使用するデータセットは NCS 1948 色の AdobeRGB 座標（整数値への四捨五入前、但し、計算値が負になった物は 0 にしてある）、及び、1 型 2 色覚、2 型 2 色覚それぞれについて各色を 43 クラスでラベリングした結果である。データセットの概要を表 3.1.1、表 3.1.2 に示す。以降、列名に表れる「P」は 1 型 2 色覚、「D」は 2 型 2 色覚のことを意味するものとする。NCS はいずれも物体色である為、光源色である AdobeRGB 色空間への座標変換の前提として光源と XYZ 表色系の仮定が要求される。本データセットでは、光源に CIE 標準光源 D65（CIE standard illuminant D65）を、XYZ 表色系に CIE1931XYZ 表色系（2° 視野）を採用している。城戸らの研究（[14, 図 1], [15, 図 1]）に倣って各代表色を黄青—明度平面に置くと図 3.1.1 のようになる<sup>6</sup>。周囲の数字は Munsell 表色系上の 5Y-5PB 平面における彩度（Munsell 表色系では chroma という）、明度（lightness, Munsell 表色系では value という）に対応する。

### 3.2 実験 1

#### 3.2.1 手続き

実験 1 では、本データセットを 1 型 2 色覚、2 型 2 色覚の色の見え方クラスにそれぞれ分類する分類器を作成する。外から与えた乱数シードを基にデータセットを 80/20 に分割する。その上で、訓練データに対して SVM の分類器を導入する。カーネルは radial basis function kernel で固定し、`sklearn.svm.SVC` のハイパーパラメータ  $\gamma$ ,  $C$ , `class_weight` を

---

<sup>6</sup> 本来のクラス数は 44 であるが、y-Bk に属する色が NCS に無かったので、表 3.1.1–3.1.2 ではそれを無視し、図 3.1.1 ではそれを #000000 で塗っている。

表 3.1.1 データセットの概要

	NCS 代表色	Adobe <i>R</i>	Adobe <i>G</i>	Adobe <i>B</i>	#P	#D	# ( $P \cap D$ )
Wt	S0500-N	235.6629	234.7774	231.2127	23	20	12
plGy	S2000-N	195.6736	194.7891	191.3287	40	36	20
ltGy	S3500-N	163.9940	162.9809	160.8466	65	58	31
mdGy	S5000-N	134.1809	134.1703	134.2813	70	61	32
dkGy	S7500-N	86.9541	86.8106	86.6477	70	65	28
Bk	S9000-N	47.2956	47.8310	49.5712	13	11	9
y-Wt	S0507-Y	239.5724	235.2736	209.1030	74	70	63
y-plGy	S2005-Y	197.0129	194.0007	177.4013	94	102	75
y-ltGy	S2502-Y	184.4848	183.2185	174.1260	77	73	44
y-mdGy	S5010-G90Y	133.8320	129.6478	109.4358	91	74	41
y-dkGy	S8010-G90Y	72.0204	68.0469	54.3256	75	58	31
vp-Y	S1020-Y	225.2654	214.4556	163.4146	64	62	53
lg-Y	S2020-Y	196.4906	186.1061	141.9709	76	85	54
mg-Y	S4020-Y	150.4791	138.6121	101.8951	103	104	55
dg-Y	S6020-Y	111.1297	99.3336	69.0294	80	82	39
vd-Y	S7020-G90Y	82.5625	75.5720	51.5917	17	13	5
pl-Y	S0540-Y	243.6672	225.0307	135.9848	31	29	23
sf-Y	S2040-Y	198.0241	178.9121	103.2851	73	78	46
dl-Y	S3560-Y	150.4791	138.6121	101.8951	126	143	83
dk-Y	S5040-Y	122.8045	104.0727	52.9174	52	51	25
lt-Y	S0560-Y	238.1361	209.5451	87.7278	26	23	20
st-Y	S1080-Y	214.4635	182.5300	0.0000	47	53	32
dp-Y	S2070-Y	185.2438	157.4583	42.1169	30	39	15
vv-Y	S0580-Y	238.6570	204.8486	0.0000	1	3	1
b-Wt	S0505-R90B	224.6986	229.3882	233.0692	24	21	16
b-plGy	S0907-R90B	211.9650	218.4358	224.1348	45	46	23
b-ltGy	S3005-R80B	164.4555	168.6782	174.3469	34	35	12
b-mdGy	S6005-R80B	103.6745	107.1785	114.0519	44	52	15
b-dkGy	S7010-R90B	73.8830	81.1664	91.7979	31	35	9

表 3.1.2 データセットの概要 続き

	NCS 代表色	Adobe <i>R</i>	Adobe <i>G</i>	Adobe <i>B</i>	#P	#D	# (P ∩ D)
b-Bk	S8010-R50B	57.8759	50.8047	62.8086	3	1	1
vp-pB	S0515-R90B	204.6848	217.5930	230.3978	25	29	18
lg-pB	S1515-R90B	179.8229	192.8497	206.1419	38	36	16
mg-pB	S4010-R90B	132.2837	140.6962	150.5120	35	37	12
dg-pB	S5020-B	93.2631	110.9807	127.1168	29	34	10
vd-pB	S8010-R90B	47.3202	54.5546	66.1253	12	9	5
pl-pB	S0530-R90B	174.2376	200.7052	226.8996	21	24	17
sf-pB	S2030-R90B	140.7151	164.1106	190.6701	36	40	18
dl-pB	S4030-R90B	100.1698	120.9944	149.8754	60	67	40
dk-pB	S6030-R90B	50.6591	70.7194	97.8596	17	16	8
lt-pB	S1050-R90B	122.1359	165.7693	217.2947	20	19	15
st-pB	S4040-R90B	78.4195	105.1236	145.6135	16	15	6
dp-pB	S4550-R90B	25.5495	68.4164	115.8239	28	24	21
vv-pB	S3060-R90B	48.3133	96.8561	157.3008	12	15	8
合計					1948	1948	1107

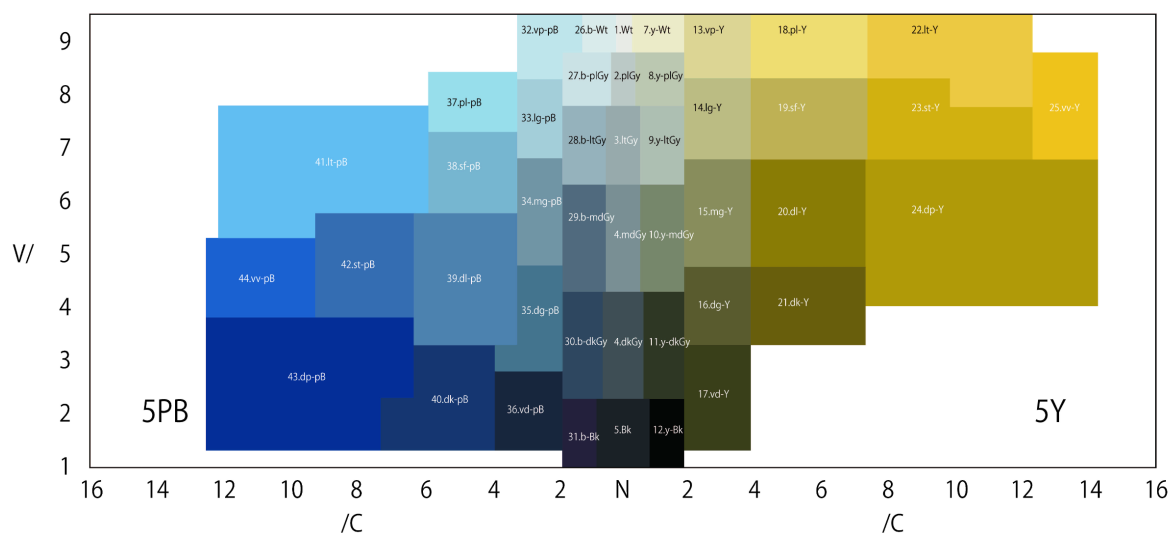


図 3.1.1 黄青—明度平面

表 3.2.1 実験 1 の結果の数値表

	P	D
$\gamma$	$1.0830 \times 10^{-6}$	$2.7812 \times 10^{-6}$
$C$	$1.0486 \times 10^6$	$1.0412 \times 10^6$
<i>class_weight</i>	<i>None</i>	“balanced”
正解率（訓練データ）	0.9936	0.9929
正解率（テストデータ）	0.9077	0.9154

学習する<sup>7</sup>．ハイパーパラメータの推定に GP による Bayes 最適化を用いる．同じ乱数シードで訓練データを更に 5 分割し、

$$\gamma \in [2^{-20}, 2^{20}] \quad (\text{但し, 対数一様分布 (log-uniform distribution)}), \quad (3.2.1)$$

$$C \in [2^{-20}, 2^{20}] \quad (\text{但し, 対数一様分布}), \quad (3.2.2)$$

$$\textit{class\_weight} \in \{\textit{None}, \text{“balanced”}\} \quad (3.2.3)$$

という条件の下、分割された訓練データそれぞれの正解率（accuracy）の平均値を最大にするパラメータを推定する．チューニングに用いる `skopt.gp_minimize` のパラメータについては `acq_func = “EI”`、`n_calls = 200` で設定する<sup>8</sup>．

### 3.2.2 結果

分割の乱数シードは 88058390 である．実験 1 の結果を表 3.2.1 に纏めた．

2 型 2 色覚は式 (3.2.1)–(3.2.3) 右辺内部で収束している．しかし、1 型 2 色覚は  $C = 1.0486 \times 10^6 \gtrsim 2^{20}$  より式 (3.2.2) 右辺の上限に一致してしまっている．正解率から推測するに、1 型 2 色覚の最適な  $C$  は  $2^{20}$  よりもやや大きいと考えられる．

テストデータにおける混同行列（confusion matrix）を図 3.2.1–3.2.4 に示す．上段は各々の絶対数、下段は正解クラス別に割合を取った物である．図 3.2.3、図 3.2.4 で対角成分から左または右に 4 列離れた成分が灰明るく光っている様子が見られる．これは、図 3.1.1 で明度が等しく彩度方向で隣接しているクラス同士の関係であり、AdobeRGB 色空間と Munsell 表色系という異なる空間ではあるものの、この関係にあるクラスが近くにあった為、誤分類が生じたと考えられる．

7 これ以外のパラメータは scikit-learn 0.22.1 の `sklearn.svm.SVC` の初期設定のままである．

8 これ以外のパラメータは scikit-optimize 0.5.2 の `skopt.gp_minimize` の初期設定のままである．





## 第 4 章 結論

## 参考文献

- [1] 岡部正隆, 伊藤啓「色覚の多様性と色覚バリアフリーなプレゼンテーション（全3回）第1回色覚の原理と色盲のメカニズム」, 『細胞工学』, 第21巻, 第7号, pp. 733–745, 2002.
- [2] 須長正治, 桂重仁, 光安祥代「S錐体刺激値差を手掛かりとした3色覚と強度異常3色覚の視覚探索能の比較」, 『日本色彩学会誌』, 第41巻, 第4号, pp. 154–160, 2017, doi: [http://dx.doi.org/10.15048/jcsaj.41.4\\_154](http://dx.doi.org/10.15048/jcsaj.41.4_154).
- [3] 栗木一郎, 石井渉, 内川恵二「加齢による水晶体黄変が色覚におよぼす効果」, 『照明学会誌』, 第84巻, 第2号, pp. 107–116, 2000, doi: [http://dx.doi.org/jiej1980.84.2\\_107](http://dx.doi.org/jiej1980.84.2_107).
- [4] 神奈川県医師会「色覚異常について」, 2019. アクセス日: 2020年1月12日. [オンライン]. 利用可能: <http://www.kanagawa.med.or.jp/ibukai/gakkoui/shikikaku/ijounitsuite201901.pdf>.
- [5] 京都府眼科学校医会「先天色覚異常と色覚バリアフリー」, 2014. アクセス日: 2020年1月12日. [オンライン]. 利用可能: <http://kyogan.org/sikikaku/colorl-h2606.pdf>.
- [6] Labs 分析・計測・測位用 アート開発「波長と色の関係 | 分析・計測・測位用アート開発 Labs | RTK モジュール・FPGA 基板の通販サイト」, 2019. アクセス日: 2020年1月12日. [オンライン]. 利用可能: <https://www.fiber-light-source-labs.com/tech/198/>.
- [7] 石原恵子, 長町三生, 大崎紘一, 石原茂和, 辻昭雄「加齢に伴う水晶体黄変化による日常生活への影響」, 『人間工学』, 第34巻, 第1号, pp. 9–16, 1998, doi: <http://dx.doi.org/10.5100/jje.34.9>.
- [8] 岡部正隆, 伊藤啓「色覚の多様性と色覚バリアフリーなプレゼンテーション（全3回）第3回すべての人に見やすくするためには、どのように配慮すればよいか」, 『細胞工学』, 第21巻, 第9号, pp. 1080–1104, 2002.
- [9] カラーユニバーサルデザイン推奨配色セット制作委員会『カラーユニバーサルデザイン推奨配色セットガイドブック』, 第2版. 大平印刷: 東京, 2018.
- [10] 日本理化学工業株式会社「ダストレス eye チョーク / 日本理化学工業株式会社」, 2020. アクセス日: 2020年1月12日. [オンライン]. 利用可能: <https://www.rikagaku.co.jp/items/eyechalk.php>.



- [11] 中野豊「JIS・ISO・IECの動向——改正 JIS Z 9101・JIS Z 9103の概要及び解説」, 『セイフティダイジェスト』, 第 64 巻, 第 6 号, pp. 14–20, 2018.
- [12] H. Brettel, F. Viénot, and J. D. Mollon, “Computerized simulation of color appearance for dichromats,” *J. Opt. Soc. Am. A*, vol. 14, no. 10, pp. 2647–2655, 1997, doi: <http://dx.doi.org/10.1364/josaa.14.002647>.
- [13] J.-B. Huang, Y.-C. Tseng, S.-I. Wu, and S.-J. Wang, “Information preserving color transformation for protanopia and deuteranopia,” *IEEE Signal Process. Lett.*, vol. 14, no. 10, pp. 711–714, 2007, doi: <http://dx.doi.org/10.1109/LSP.2007.898333>.
- [14] 城戸今日子, 桂重仁, 佐藤雅之, 須長正治「黄青—明度平面における 2 色覚の色カテゴリ」, 『日本色彩学会誌』, 第 41 巻, 第 6 号, pp. 76–79, 2017, doi: [http://dx.doi.org/10.15048/jcsaj.41.6\\_\\_76](http://dx.doi.org/10.15048/jcsaj.41.6__76).
- [15] 城戸今日子, 桂重仁, 須長正治「2 色覚の混同色の黄青-明度平面への色カテゴリマッピング」, 『日本色彩学会誌』, 第 42 巻, 第 3 号, pp. 158–160, 2018, doi: [http://dx.doi.org/10.15048/jcsaj.42.3\\_\\_158](http://dx.doi.org/10.15048/jcsaj.42.3__158).